

平成22年10月10日

ヘルパーステーションだいとう ケアレポート No22

ヘルパーステーションだいとうのケアレポートNo22をお届けします。

先日、日ごろの実践の中での工夫や成果、特色を発表し、参加者同士で意見交換をしながら交流することを目的とした第2回姫路市・西播介護サービス実践発表会が開催されました。その発表会でヘルパーステーションだいとうのサービス提供責任者の佐藤が発表した内容をお知らせいたします。

<発表概要>

「訪問介護での自立支援」と題して日ごろの私たちの仕事を「自立支援」の視点からみつめなおしてみました。

目に見える動きとしての自立支援は、ヘルパーと一緒に掃除を行ったり調理や買い物の材料やメニューを考えてもらったり、できる事が継続してできるように考えていること。

もう一点は、目に見えにくい動きとしての自立支援は、「やりたい、したい」気持ちを引き出したり、一方で「できていない」理由を色々を探したりする事や本人が「こうしたい」気持ちが達成するようにお手伝いをする。本人が「わがまま」かなあと思う事を言ってもらえるような利用者との関係（一般的にはわがまはマイナスのイメージとしてとらえるのかもしれませんが、相手が思っている事を口に出してもらう事を大切にしたいという考えです。もちろん言われた事のすべてがヘルパーの業務でできないですが）目に見える動きの考えだけでなく、気持ちを考えた支援ができるかどうか大きなポイントとなっていると思います。

しかし、「自立支援」を考えながらもスムーズに進まない事もあり、本人の気持ちを聞き出せなかったりサービス提供責任者とケアマネジャー間やヘルパー

間でもうまく考え方が統一できずにヘルパーが本人のできる事をしてしまったりサービス提供責任者が本人や家族に「自立支援」そのものの考えをうまくお伝えできなかつたりする事ができないことがうまくいかない理由になっているようです。

制度上での「自立支援」の動きをみてみると、介護保険法においては「利用される尊厳を保持し、その有する能力に応じ自立した生活を営むことができるように支援が必要」（要約）と記載されています。

また、ICF（国際生活機能分類）というモデルにおいては、まずICFとは人間を総合的に捉えようという一つの形で「人が生きる」ということを身体状況や日々の生活の状況や社会参加だけでなく、その人をとりまく環境（バリアフリーなどの物的環境だけでなく、人的環境、社会的環境やその人それぞれのライフスタイルやそれを支える価値観など様々な要因が相互にからまっています。このようにして考えるとあらためて私たちも含めて人は「十人十色」という言葉が思いうかびます。

今までの介護のケアは困っている事やできない事（マイナス面）をお手伝いするイメージからでしたが、今後はその考えを進展させ、今できている事やしたい事を増やすようにといった考えが、私たちが支援を行う中での様々な多職種「共通言語」として提唱されています。

さらには次回の介護保険制度改革においても、ケアマネジャーが作成するケアプランでの「目標」をどのように達成するか、より具体的に目標達成に向けたサービス計画を作成していくといった内容も議論されているようです。

今回は「自立支援」の視点からヘルパー業務を考えてみましたが、業務の根底として考える必要がありながら、「自立支援」の考えは様々にあり、ただ業務内容を統一するだけでは不十分であり利用者の気持ちや考え、私たちがどのように考えて業務を行うかといった「気持ち」を共有する事が必要だと考えます。

それは少しおせっかいなのかもしれませんが、私たちが「その人らしく」あってほしいと思う気持ちをどうすれば相手の方に伝えられるのか、これから考えていかなければいけない課題を発見できた発表会となりました。